

平成 21 年 4 月 13 日現在

研究種目：基盤研究 (B)

研究期間：2006～2009

課題番号：18404014

研究課題名 (和文) 仏・西二カ国の定点観測型農村住宅変容過程追跡と  
循環型集落環境システムに関する研究研究課題名 (英文) Study on changing process of farmhouses by fixed point observation and  
sustainability of settlements environment for two countries, France and Spain

研究代表者

森下 満 (MORISHITA MITSURU)

北海道大学・大学院工学研究科・助教

研究者番号：10091513

研究分野：住環境計画、都市・農村計画

科研費の分科・細目：都市計画・建築計画

キーワード：定点観測、農村住宅、変容過程、循環システム、集落環境、農村計画、  
集落空間計画

## 1. 研究計画の概要

(1) 本研究は、第 2 次大戦後長期間にわたってそれぞれ同一の農村住宅・集落を対象にして定期的、継続的に観察調査を行い、それぞれの方法で農村住宅・集落の変容過程とそのメカニズムを追跡しているフランス、スペイン及び日本の建築学・環境学・社会学の研究者が国際的な協調・共同体制をとり実施するユニークな学際型共同研究である。

(2) 事前によく調整された同一の視点と方法で 3 カ国研究者の同時参加型調査をフランス、スペイン両国において実施することにより、それぞれの研究グループが各自の調査方針と基準で行っていた従来の方法では必ずしも明瞭にとらえられなかった新しい変容と維持のメカニズムを探り出すと同時に、それぞれの農村地域に特有の循環型生活と集落環境システムの実態及びその特性を解明し、別途実施する日本(北海道地区)の農村住宅・集落調査事例と比較検討する。これによりこれからの地球環境時代に重要性を増す地域循環型ライフスタイルと集落環境システムの再生・維持方法についてそのあり方を総合的、統一的に検証する。

(3) 具体的には仏・西 2 カ国の定点観測対象農村集落・住宅において、共通の方式で、①集落の配置形態と土地利用・地域環境実態調査、②集落内農村住宅の

間取りと住まい方の実態調査、③集落内農家の近隣生活実態調査及び営農実態調査をそれぞれ実施する。さらにこれらの調査資料を総合的に検討することにより、④各地域の農村住宅の変容過程と変容・維持・再生のメカニズムを検証すると同時に、⑤これからの循環型社会において望まれるライフスタイルと集落環境システムのあり方について検証を加え、同時に日本の場合と比較考察することにより、より多様でユニバーサルな農村住宅・集落環境像を提案する。

## 2. 研究の進捗状況

(1) フランスでは、フランス国立科学研究センター・都市建築社会研究所の Philippe BONNIN・所長と Jennifer HASAE・主任研究員のコーディネートのもとに、①ロゼール県モンベル村のモンベル、サレス、ヴィルスール の 3 つの集落において、9 件の農村住宅を対象に、間取りと敷地 (納屋・牛舎を含む) の実測・記録、建物の外観・内部の記録 (写真撮影)、居住者へのヒアリングの諸調査、②とくにモンベル村においては、集落全体の道路、水系、建物 (住宅・納屋・牛舎等)、建物へのアクセス、門・塀、庭、建物立面の形態・位置の実態調査、③集落の歴史に関する長老へのヒアリング調査、④ヴァロン (小さな谷の意) と呼ばれる緩やかな起伏をもつ地形の分析など、フランス中央山岳地帯における酪農村の住宅と住生活、集落空間構成の実

態調査、分析を行った。その結果、集落の基底構造としての水系と、地形に適応した建築原型の形成とその集合体としての集落空間構成を捉えることができた。

(2) スペインでは、バレンシア工科大学建築学院の Fernando VEGAS、Camilla MILETO 両教授のコーディネートのもとに、バレンシア州アデムース地域のカスティエルファビブ、トレバツハの2つの集落において、各6件・全12件の農村住宅を対象に、①各階平面と主要な断面、立面の実測・記録及び各図面の作成、②建物の外観及び内部・全室の記録(写真撮影)、③居住者へのヒアリング、④とくに小高い丘の頂に集落が形成されているカスティエルファビブ集落においては、集落全体の道路、街区の形態、建物の階数、建物へのアクセスの実態など、スペインの山岳地帯における農村の住宅と住生活、集落空間構成の実態調査、分析を行った。その結果、集落の都市的な街区構成ー完全に分離された農地と住宅地、背割線をもち3~5階建ての住宅群で構成される高密度の街区構成ーと、その特質ある街区と地形に適応した建築原型の形成ー起伏ある敷地の高低差を生かした特徴的な断面構成・居住者の主アクセスと家畜の副アクセス・階段の位置、特徴的なLDKの主要室の位置(GF以外)ーを明らかにし、循環型集落環境システムの基底となる空間構成を捉えることができた。

(3) 以上の知見は、従来にはない新しい発見として重要性が高く、かつ循環型集落環境システムの解明の第一歩として意義が大きい。

### 3. 現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。  
(理由)

上述のとおり、フランスでは2007年10月に、スペインでは2008年9月に、それぞれ現地調査を実施し、予定していた研究データの収集を終えている。また、それらのデータの整理、分析、考察もおおむね順調に進展している。

### 4. 今後の研究の推進方策

(1) 昨年度スペイン・バレンシア州アデムース地域でおこなった農村住宅・集落調査結果の分析、考察に関する研究討論および講演会を実施する。また、成果を該当する学会(日本建築学会他)に論文として発表する。

(2) 一昨年度のフランス・ロゼール県モンベル村も昨年度のスペイン・バレンシア州アデムース地域も、ともに標高1,000m前後に形成された山岳集落であるが、その集落空間構造をより明確に把握するために、日本の代表的な山岳集落の調査を実施し、比較分析を行う。

(3) 当該年度の最終ステージにおいて、4年間にわたる本研究全体の総括を行い、研究成果報告書としてまとめる。また、成果を該当する学会(日本建築学会他)に論文として発表する準備を行う。

### 5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

森下満、住谷浩、月舘敏栄、西村伸也、足達健夫、鳥山香織、Philippe BONNIN、Jennifer HASAE、「フランス中央山岳地帯の酪農村の集落空間構成ーロゼール県モンベル村のケーススタディーー日仏伊三カ国の定点観測型農村住宅変容過程追跡と循環型集落環境システムに関する研究・第一報」、日本建築学会北海道支部研究報告集、No. 81、pp307-312、2008年、査読無

〔学会発表〕(計1件)

森下満、「フランス中央山岳地帯の酪農村の集落空間構成ーロゼール県モンベル村のケーススタディー」、日本建築学会北海道支部、2008年6月28日、札幌市・北海道工業大学